

The region agriculture leader of Wakayama prefecture

和歌山県
和歌山県農業士会連絡協議会

和歌山の 農業士

2026
3
March

地域農業をリードする熱き農業者たち

第26号



はじめに

本誌『和歌山の農業士』は、和歌山県の地域農業を牽引するリーダーとして知事に認定された『農業士』が、互いの活動を共有するとともに、関係者の皆様や一般の方々へも、広く積極的に情報発信していくため作成しています。

農業士が長年の農業経験で培った経営観や、これからの農業にかける熱い想いを紹介する内容に加え、各地域で展開される農業改良普及活動や、農業士会としての取り組みなどを内容に盛り込んでいます。

農業に関係する皆様方には、是非、ご一読頂き、地域農業の実情や農業経営の現状等について、ご理解を深めて頂ければ幸いです。

C【目次】 CONTENTS

<巻頭言>

- 「矜持創造」 (和歌山県農業士会連絡協議会 副会長 小川 真司) …………… 1
- 「新規就農者の確保と定着につなげる総合支援の重要性」 (和歌山県農林大学校就農支援センター 所長 黒沼 稔之) …………… 2

<私の農業>

農業士達がこれまで培った自身の経営や活動を紹介

- 新たな労働力確保で規模拡大と高品質生産！ (和歌山市 指導農業士 松本 弥) …………… 3
- 「農業が普通の職業になるように」 (紀の川市 青年農業士 上畑 雅敬) …………… 5
- 地域に根ざし、自然と共に生きる複合経営 (橋本市 地域農業士 前田 治樹) …………… 7
- みかんの反収～山畑で5t、地畑で10t～を目指して (有田川町 地域農業士 小畑 公貴) …………… 9
- 私の農家ライフ～力まず悠々と歩む～ (日高川町 指導農業士 中村 秀美) …………… 11
- 次代のため優良園地を作って後継者に (上富田町 地域農業士 森 紳一郎) …………… 13

<農業に懸ける想い>

農業への熱い思いや取り組みを紹介

- 就農と今後の歩み (海南市 4Hクラブ 山下 芙都史) …………… 15
- 「我が家の農業」 (紀の川市 地域農業士 駒井 良成) …………… 16
- 自分に合った果樹栽培 (橋本市 青年農業士 前谷 全孝) …………… 17
- 樹の本来の力に寄り添う (湯浅町 青年農業士 北村 真文) …………… 18
- スマート農業へのチャレンジ (印南町 地域農業士 長井 利憲) …………… 19
- 規模拡大と園地の改善により、効率的な農業を目指す (上富田町 青年農業士 森 夏輝) …………… 20

<県農林大学校生です>

農林大学校1年生の自己紹介&近況報告 …………… 21

●園芸学科

副島 佑介

築山 大河

津村 隼希

藤原 史

山畑 明日菜

山本 悠介

横畑 光洋

●アグリビジネス学科

飛田 統羽

巻頭言

「矜持創造」

和歌山県農業士会連絡協議会

副会長 小川 真 司



本誌への寄稿は、青年農業士時代に『私の農業』のコーナーに掲載頂いて以来、およそ10年ぶり。この間に、地域農業士を経て、指導農業士となり、令和7年度より和歌山県農業士会連絡協議会副会長を拝命するに至りました。歳月の移ろいを感じながら、この度の巻頭言執筆に際し、自身の歩みを振り返るべく、久方ぶりに当時の原稿を一読しますと、拙い文章ながらも、自身の矜持が記してありました。

「選択肢の提供を通じて社会を豊かにする」、私の全ての取り組みに通底するこの矜持は、確固たる指針であると同時に原動力でもあります。船に例えるならば、さしすめ羅針盤兼エンジンです。当時私が目指したのは、農業の雇用創出産業化。その実現に向けて、作型モデルの確立、人材の育成、販売戦略の立案等々、なすべきことは多岐にわたり、試行錯誤の連続でしたが、ブレることなく今日の私があるのは、この矜持によるところが大きいです。あれから10年、私の元で研鑽を積み、独立就農を果たした新規就農者は10名を数え、府県を超えて活躍する彼、彼女達の成長を心より嬉しく思います。なお、私は矜持（≒理念、Mission）を何より重視しており、就農希望者の相談に乗る際にも、営農プランを精査する前に、経営のさらには人生の礎となる矜持を固める支援から始めることにしています。さて、直近10年の自分史を紐解いて、改めて矜持の大切さを再確認したところで、次に農業士会の在りように触れたいと思います。

通常多くの組織は、共通の命題（≒矜持）を持つ個人が、これを結節点として集うことで形成され、

その達成を目指します。農業士会は、その生い立ちが特殊なため、この時点で、異形の組織となることが宿命付けられていたのかもしれませんが。元来、農業士会は、栄誉ある称号として「農業士」を授与された篤農家が、意見交換を行うことを主眼に設置されたサロンに近いものでした。組織というよりも“場”の性格が強かったのです。つまり、生来、農業士会からは、組織の核となる矜持が抜け落ちており、仏像作って魂入れずを地で行く組織だったわけです。それゆえ、今日の農業士会が「会費の値上げ」や「会員数の減少対策」など、組織の維持に苦慮し、寄る辺なく漂流状態にあるのも頷けます。情報過多の現在、費用対効果を鑑みれば、サロンとしての農業士会はその存在意義を失っています。

しかし、農業士会そのものが無価値になったわけではありません。農業士会の最たる強みは、年齢、性別、地域などを超えた多様な人的資本の存在です。有数の篤農家が集う農業士会が、知識を共有する場から、多様な知や発想を擦り合わせ、新たな叡智を創造する場へと昇華することが生存戦略の肝であると考えます。また、新たな叡智と同等以上に価値があるのは、思考プロセスや思考パターンの引き出し。農業士会が考え方を学べる場となれば、そこから生れる可能性は無限に広がります。サロンから知の泉へ。農業士会の未来に胸が躍りますが、まずは欠けたままとなっている組織の核たる矜持を、会員の皆様の知を結集して、創造できますと幸いです。

巻頭言

「新規就農者の確保と定着につなげる総合支援の重要性」

和歌山県農林大学校就農支援センター

所長 黒沼 稔之



農業士の皆様には、地域農業のリーダーとしてご活躍されておりますことに対し、心より敬意を表するとともに、就農支援センターの農家研修先として多くの実習生を受入れ、熱心にご指導いただいておりますこと厚くお礼申し上げます。

当センターの業務は、就農相談、就農研修、就農定着に向けた関係機関との連携サポートを主な柱としています。

その中でも就農研修につきましては、研修生のニーズに合わせて、農業体験研修（1日）、ウイークエンド農業塾（10日）、技術修得研修（25日／5カ月）、社会人課程（職業訓練9カ月）に加え、今年度から新規就農に必要な専門知識と技術を本格的に修得する新規就農者実践研修（10カ月）を新たに創設しました。

このうち、技術修得と社会人課程、実践研修については、生産現場での実践カリキュラムを組入れ、受入農家や集落の方々と繋がりを持つことで、研修生の円滑な地域への就農定着を目指しているところです。

さて、県内の農業を取り巻く情勢は、農業従事者の減少が著しく、販売農家数は直近の10年間で約25%減っており、年齢構成も65歳以上が6割以上とその減少と高齢化は進行しています。

一方、県内の新規就農者を形態別に見ますと、直近の5年間で新規参入者が親元就農者に次いで多く、全体777名の3割以上を占めています。

このことから、Uターン就農者はもとより、県外からの参入者に対しては、技術を習得し就農開始から経営が安定するまで、一貫したサポートが益々重要となっています。

本県では、こうした参入状況を踏まえ就農希望者に対して様々な支援をおこなっていますが、他府県も同様に地方にマッチした支援策を打ち出しており、全国的に担い手の獲得競争は激しくなっています。

このため、県内に優秀な担い手を確保し定着させていくには、新規就農者が安心して就農地、居住地等を確保できる総合支援が必要であり、県、市町村、JA等の関係機関の連携がますます重要となっています。

そして、関係機関の伴走支援に加えてさらに大事なことは、地域における指導者（匠）の存在です。

以前、当センターの修了生に伺ったところ、就農当初に『師匠』と出会えたことが農業経営の安定化に大きく寄与したとお聞きしました。

「『師匠』からは栽培技術はもとより、農地や倉庫、中古機材など様々な物件情報をいただけて助かった」、「『○○さん（師匠）が世話してあげている新人さん』情報が、集落での信用につながり、条件の良い畑の貸借相談が、近隣の方からいただけるようになった」とのことでした。

地域において、信望が厚く面倒見の良い優れた指導者の支えが新規就農者の定着に対して、どれほど貢献度が高いかは言うまでもありません。地域農業の振興を通じて信望を得ている農業士の方々には、このような新規就農者の『師匠』役として、そして地域農業の牽引役として、今後も就農を志す方々に対しまして、ご指導とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

当センターも、就農サポートを行う総合的な窓口機関として、新規就農者の確保と定着に向けてこれからも積極的に取り組んでまいります。

私の農業

新たな労働力確保で 規模拡大と高品質生産！

和歌山市 指導農業士

松本 弥



1. はじめに

私はもともと県職員として13年間奉職し、平成8年度に県職員を退職して農業を始めました。

就農時は親から引き継いだ220aの農地でしたが、就農した直後から近隣農業者に貸していた農地が高齢化と担い手不足で次々と返却され、現在では就農時の1.5倍の320aで水稲と都市近郊型の野菜生産を行っています。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
露地ショウガ	120 a
施設ショウガ	100 a
コマツナ	100 a
水稲	120 a
○労働力	
家族	2人
実習生	6人

2. 農業経営の方針と特徴

私の農業の特徴は、和歌山市北部の砂地地帯で、新ショウガを中心に、その裏作にハウレンソウ、コマツナなどの軟弱野菜を周年で栽培し、最近では種ショウガの栽培にも取り組んでいます。

私が経営を引き継いだ時より経営規模が大幅に拡大したことで家族と臨時雇いで成り立っていた経営から一転し、労働力の確保が急務となり、色々検討

した結果、国により人手不足を補うために作られた特定技能実習生制度を活用して中国から4名～6名の実習生を受け入れて労働力を確保することにしました。特定技能実習生制度は、労働関係法令の遵守や適切な雇用契約は専門業者に任せますが、日本語での業務指示や安全指導が正確に伝わらず、事故やトラブルに発展するケースも多いことから、実習生



Web カメラ



スマートフォンの映像



実習生の作業風景

の受け入れに伴い、ハウス内や調整室等に8台のカメラを配置して、スマートフォンで常時作業の進捗状況を把握し、随時電話で作業の指示を行うことで実習生の安全確保と労務管理を行っています。

また、クラウドを活用した録画環境を整えること

で様々なトラブルに対応できる環境整備も進めています。

これらにより、作業状況などの記録を可視化することで業務の効率化や技術指導も的確に指示することができ、農産物の品質管理の徹底を図っています。



軟弱野菜の調整機械



広大な軟弱野菜



大量の有機資材

3. 今後の経営方針

近年、夏場の高温などの長期的な異常気象により軟弱野菜の栽培が年々難しくなっているなか、IoTやクラウドを活用し、作物の生育状況、土壌状態、病害虫リスクなどを正確に把握し、最適な管理を行う栽培も視野に入れ、AIも積極的に取り入れたいと考えています。

また、昨今の資材価格が高騰していくなか、私が土づくりとして大量に使用する有機土壌改良資材も高騰し、経営を圧迫しています。

現在、サトウキビの葉を原料とする有機資材を多用しており、肥料の効果と土壌菌の働きが活発になることで腐植の形成と団粒構造に富んだ土づくりを目指していますが、それに代わる安価な地域内で手に入る土壌改良剤を模索しています。高品質な野菜作りを目指した土づくり、ITや機械化による作業の効率化、コスト低減による経営の健全化を目指そうと思っています。

4. おわりに

農業は生活手段のみならず、毎日こまめに畑に足を運び、作物の状態をよく確認することで土や作物から感じる状態と適期を逃さない栽培技術が重要だと思います。また、日々の苦労や収穫の喜びを感じることを楽しみながら農業を営んで本当に良かったと感じています。

「農業が普通の職業になるように」

紀の川市 青年農業士

上 畑 雅 敬



1. はじめに

私は大学を卒業後、和歌山県海南市の生活雑貨メーカーに入社し、営業部として和歌山で3年、東京で5年間働いていました。和歌山を離れたことで、改めて地元への思いが大きくなり、桃農家をしていた祖母の引退や2018年の台風被害なども重なり、農家になることを決意しました。

和歌山に帰ってきて約2年間、(株)八旗農園で研修をした後2022年度から独立就農し、今年で4年目のシーズンを終えました。

2. 農業経営の特徴

私が農業をしている地域は200年以上続く桃の産地であり、産地ブランドである「あら川の桃」を栽培しています。現在約95aの園地で桃のみを栽培しています。

私の直近の目標は年間労働時間1920時間、つまり1日8時間換算で240日働いて700万円の所得を目標にしています。非農家の方の農業のイメージというと、休みがない、稼げないというイメージが強く、このままでは若い方に興味を持ってもらうことが難しく、まずは個人経営の農家としてサラリーマンと同じ水準の労働時間でそれなりに稼げるモデルを体現したいと考えています。

私たちの産地で言えば比較的価格も安定しており、700万円の所得をあげることは可能な印象で

農業経営の概況

○作付品目と面積	
桃	95a
○労働力	
本人	1人 (約200日)
家族(母)	(約80日)

すが、桃だけでは繁忙期に作業が集中してしまい、労働時間を抑えることが難しいと感じました。そこで2025年度に新たな取り組みとして、桃のポット栽培とキウイフルーツの栽培の2つに着手することにしました。

ポット栽培に関しては、低樹高での管理による作業効率向上や農薬の削減などを主な目的とし、加えて梨やぶどうなど新たな作物も試験的に栽培を行っています。

キウイフルーツに関しては、収穫が桃の農閑期である11月であり、年間の作業日数も比較的少ない作物ということで、将来的な労働日数の効率化と収益強化のために取り組んでいます。

3. 今後の経営方針

メインの桃栽培に関しては、ある程度収量も上がってきており、拡大というよりもしっかりと維持しながら品質の向上に努めていきたいと考えています。

その他の取り組みに関しては、2025年度にポット栽培やキウイフルーツの園地整備など、大きな投資は完了しましたので、今後はこういった新たな取

り組みの部分をしっかりと軌道に乗せていき、目標の数字をまずは達成したいと考えています。そのためにも直接販売の比率を少し

高めようと考えており、現状金額ベースで10%ほどのところを20%くらいまで上げたいと思っています。直接販売に関しては、既存の園地ではなくポット栽培のものを中心に、一つのブランドとして育てていきたいと思っています。



根域制限栽培



もも慣行栽培袋掛け期



もも慣行栽培収穫期

4. おわりに

農業経営以外の部分にはなるのですが、地域農業を支えるための活動にも力を入れていきたいと考えています。現在、私たちの地域の20代～40代のメンバーで立ち上げた【わか桃会】というチームに参加しており、地域の学校での授業やコラボ企画、イベント出店、若手農家への勉強会・交流会の開催など、地域農業を盛り上げていくための様々な活動をしています。

地域外でも和歌山県の農家で結成された【農筋(NOKIN)】というチームでPodcastやYouTubeでの発信なども行っています。2025年12月にはその中の【農筋野球部】という野球チームでクラウドファンディングを実施し、目標金額を達成するこ

とができました。

どちらの活動も「地域農業を盛り上げたい」や「農業や農家の価値をもっと高めたい」といった熱い思いをもったメンバーが集まっており、私自身日々刺激を受けております。

今後も自農園の経営だけでなく、様々な角度から農業を盛り上げていきたいと考えておりますので、どこかで見かけた際は是非応援をよろしくお願いいたします。

私の農業

地域に根ざし、 自然と共に生きる複合経営

橋本市 地域農業士

前田 治 樹



1. はじめに

私は 2007 年に奈良県西吉野の農家に就農し、2019 年に地元・和歌山県橋本市で独立して「前田農園」を立ち上げました。幼いころから自然に囲まれて育ち、土の匂いに親しんできたことが、今の自分の原点になっていると思います。

就農当初は、思うようにいかないことばかりでした。天候に左右される収穫、病害虫の被害、そして市場価格の変動。それでも「どうすれば、より良いものを、安心して食べてもらえるか」という思いを常に胸に持ち、試行錯誤を重ねてきました。

農業は、ただ作って終わりではなく、人と自然、そして地域との関わりがすべてだと感じています。橋本の地で農業を続ける中で、地域の方々に支えられながら、少しずつ自分なりのやり方を築いてきました。現在は、梅、柿、八朔を中心に、スタッフと共に力を合わせて農園を運営しています。

2. 農業経営の方針と現況

前田農園ではエコファーマーとして「環境にやさしく、手間を惜しまない農業」を基本にしています。園地は紀ノ川流域の中山間地にあり、傾斜地を活かした日当たりの良い環境が特徴です。ここで、梅、柿、八朔、みかんなどを栽培しています。

主力は南高梅で、約 150a の園地を有しています。特別栽培認証を取得し、有機肥料 100% を使用し

農業経営の概況

○作付品目と面積	
うめ	150a
かき	110a
はっさく	60a
みかん	20a
○労働力	
常時雇用	2人
臨時雇用	5人



梅の選別



家族写真

ています。梅の収穫では、木の外側で日当たりの良い「天成り」の実を中心に収穫することで、色づきや品質を重視しています。

柿は極早生、刀根早生、富有柿を中心に 110a。減農薬栽培で環境に配慮しています。柑橘類では、八朔・みかんを合わせて約 80a 栽培し、同じく特別栽培認証を取得。肥料や農薬を最小限に抑え、地力を活かした持続的な生産を行っています。

作業効率の向上にも取り組んでおり、従来の剪定ばさみを電動式に切り替えるなど、省力化と品質維持の両立を進めています。また、家族とスタッフで力を合わせ、年間を通じて安定した出荷体制を整えています。

販売面では、直販と EC を組み合わせた形を採用

しています。特に通販プラットフォーム「食べチョク」では、消費者の方々から高い評価をいただき、2025年には「推し生産者1位」に選ばれました。地域では、ふるさと納税の返礼品としても採用され、橋本市の農産物ブランドとして少しずつ浸透してきています。



梅



柿



はっさく

3. 今後の経営方針

これからの農業は、ただ良いものを作るだけではなく、どのように届けるか、そして誰と共に作っていくかが重要だと思っています。そのため、今後は「地域連携」と「次世代育成」を見据えた経営を進めていきたいと考えています。

私は2022年から「紀北果樹ネットワーク」の幹事長として、地域の若手農家と共に情報交換や技術共有を行っています。同じ志を持つ仲間たちと、果樹産業の未来をどう描くかを語り合う時間は、私にとって大きな財産です。

また、気候変動による不安定な天候や高温障害といった課題にも、地域全体で対応していくことが欠かせません。これからは、環境への配慮をさらに深め、資材の見直しや耐暑性品種の導入なども検討しています。

経営面では、家族が中心となる小規模ながらも高付加価値型の農業を目指します。直販比率を高め、消費者と直接つながることで、価格に左右されない安定経営を確立したいと思っています。そのためにも、

生産から販売まで一貫した仕組みづくりを進め、若手にも参加しやすい環境を整えたいと考えています。

4 おわりに

農業を始めてから十数年が経ちました。振り返れば、失敗の連続でしたが、その一つひとつが今の自分をつくってくれたと思います。自然の力を借り、人の手で支え合いながら続けていく農業には、まだまだ可能性があると感じています。

橋本市という土地は、気候も人も温かく、助け合いの文化が根づいています。この地域で生まれ育ち、今こうして農業を通じて恩返しができることに感謝しています。これからも、自然と共に生き、地域と共に歩む農業を続けていきたいと思っています。

そして、次の世代がこの土地で農業を誇りに思い、夢を持って挑戦できるよう、私自身がその背中を見せていけるよう努力していきたいと考えています。

これからも一歩ずつ、確実に。橋本の地で「人にも自然にもやさしい農業」を続けていきたいと思っています。

私の農業

みかんの反収～山畑で5t、 地畑で10t～を目指して

有田川町 地域農業士

小畑 公貴



1. はじめに

私は高校を卒業後、民間企業へ就職しましたが1年で辞めて、近隣のハウス建設会社で4年ほどアルバイトをしていました。

私の住んでいる有田川町（旧金屋町）でスプレーギク栽培が導入され始めた当初、みかんとアスパラガスを栽培していた両親もスプレーギクを始めていましたので、私も新しいことに挑戦したいと思い23歳で就農しました。

初めは、スプレーギクをアスパラガスのハウスで栽培していましたが、作業がしにくかったので、ハウスの建設会社で培った技術を生かして自分で鉄骨ハウスに建て直して、本格的に取り組み始めました。

それから34年間、みかんとスプレーギクの2本柱で栽培を続け、昨年息子が就農し、ゆくゆくはバトンタッチできるよう一緒に農作業に励んでいます。

2. 農業経営の特徴

私は、有田川町小川地区で傾斜地はみかん、平地はスプレーギクのハウスをしています。

スプレーギクは、当初から、2棟のハウスで周年栽培を行っていましたが、みかん価格の低迷時期に価格が良く、1年を通して収入があるので経営をカバーすることができました。しかし、最近では、海外からスプレーギクの輸入増加、コロナ以降需要の減退、夏場の高温対策など、今までと比べて栽培や

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	110 a
早生	90 a
普通	20 a
スプレーギク	20 a
○労働力	
家族	3人
パート	1人



スプレーギクハウス

販売環境が厳しくなってきた、出荷時期によって価格が良かったり悪かったりと安定しない状況になっています。

一方、みかんは、近年価格が安定してきている中で、6～7年ほど前から知り合いを通じて、海南市の篤農家さんに肥培管理やせん定方法など指導を受

けて、自分でも勉強しながら今までの作り方を思い切って変えてみました。日頃から樹の状態を観察して、その時々合った肥料や液肥の散布、枝吊りなどに労力をかけています。

その結果、毎年着果が安定し、反収は6～7tが確保できるようになるとともに、品質が向上し玉揃いも良くなり、品質、量ともに向上しました。

手をかけたらかけた分だけみかんの樹は答えてくれるので、最近では、みかん作りが面白くなり、反収がいつか師匠に追いつくことを目標として頑張っています。

3. 今後の経営方針

今後もみかんとスプレーギクの複合経営を続けていきたいと考えています。現在、家族3人とパート1人で管理作業をしていますが、もう1人雇用しても年間を通して安定的に働いてもらえる経営をしたいです。

また、昨年就農した息子のためにもみかんは増やしていきたいのですが、家の周辺の平地への園地集約、園内道を含めた改植や作業しやすい樹高など、働きやすい園地づくりも意識したいと考えています。



枝吊りした園地

4. おわりに

スプレーギクやみかんを栽培していると、技術的な対応をどうしたらいいのか悩むことがありましたが、人に聞いて教えてもらうことで気づきや別の方法を知ることもあったので、若い人には人との出会いを大切に、わからないことは積極的に聞いて成長してもらえればと思います。

昨年、「有田・下津地域の石積み階段園みかんシステム」が世界農業遺産に認定されました。これを契機に産地に活気があふれることを祈ります。



バランスの良い着果枝と来年の成り枝



園内道の設置

私の農業

私の農家ライフ～力まず悠々と歩む～

日高川町 指導農業士

中村 秀美



1. はじめに

私は、日高郡日高川町で柑橘とミニトマトを栽培しています。代々柑橘農家でしたが、昭和50年頃に花き類の需要の高まりを受けてパイプハウスでスターチスやスプレーカーネーションの施設栽培を手がけました。

結婚当初は、小学校教諭として働いていましたが、平成2年に夫の父が亡くなったのを機に退職し、就農しました。それと同時期に鉄骨ハウスを建て、ロックウール耕でスプレーバラの養液栽培を始めました。

ところが、10年程経過した頃、夏の高温で品質のよいバラが作りにくくなり、また、バブル経済の崩壊でバラの単価が下がったことも重なり、品目を見直すことにしました。それで、栽培設備をそのまま利用できるミニトマトに転換して今に至っています。

現在は、娘夫婦が就農して4人で協力しながら、刺激を受けながら日々の作業に励んでいます。



ミニトマトを栽培するハウス（一部）

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州ミカン	
宮川早生	30a
ゆら早生	30a
不知火	20a
ミニトマト	
キャロルセブン	29a
アイコ	20a
水稻（自家消費）	11a
○労働力	
家族	4人
臨時雇用	4～5人

2. 農業経営の特徴

柑橘中心の経営から収益の主軸を施設園芸に移して30年ほどになります。

以前は温州ミカン、甘夏、八朔、清見、セミノール、キウイフルーツと多品目を栽培していましたが、急傾斜



かつてスプレーバラを栽培した設備で育つミニトマト

地など条件の悪い圃地は耕作を断念し、改植を進めてゆら早生、宮川早生、不知火の3品種に集約しました。

施設栽培に関しては、子供世代が農業を始めた令和4年から分割して経営することにしました。私たち親世代は養液栽培の「キャロルセブン」25aと柑橘80aを、子供世代が土耕栽培の「アイコ」20aと「キャロルセブン」4aを受けもっています。農地と経営を分けたことによって、作業量が減り、労働時間が短くなって気持ちにもゆとりができました。それによって作物の状態に目が行き届き、病気や生育の変化にいち早く対処できることで品質向上につながっていると思います。

お互い独立した経営にしているからこそ、それぞれ責任を持ち、協力や情報交換をしながらよい意味で競い合い、刺激し合うことで共に成長していることを実感しています。

3. 今後の経営方針

近年、自然環境の変化が叫ばれ、農業においても高温障害や害虫の異常発生など困難な課題が顕在化しています。農業を営む条件は厳しさを増していますが、スマート農業を取り入れて栽培環境の最適化と作業の効率化に努め、更に生産性の向上と高品質化をめざしたいと思います。

また、選別機の導入による省力化やロックウール耕の特性を活かした挿し芽苗利用によるコスト削減に取り組んで収益の向上を図るよう、家族一丸となって努力していこうと考えています。

4. おわりに

これからも、丹精込めて育てた農作物を消費者に「美味しい」と喜んでもらえた時の充実感、達成感を感じるために努力し、少しでも理想に近づいていけたらと思います。

また、休養も大事だと考え、なるべく日曜日は



休日にするようにしています。趣味を持つことも心の豊かさに繋がり、日々の生活に刺激と潤いを与えてくれると思います。私は4年前に雅楽の演奏を視聴する機会があり、その独特な音色と雅な雰囲気魅了されました。それをきっかけに雅楽の世界に飛び込み、古典楽器の演奏を楽しんでいます。これからも、自分なりの農家ライフスタイルを楽しんでいきたいと思っています。

農業を始めた頃、私は農業をしている同世代の女性に出会う機会がなく、黙々と農作業をするだけでしたが、農業士会に参加して農業の想いや悩みを話し合える仲間ができ、視野が広がって、前向きになることができました。

最後に、農業士として20年になりますが、今年で卒業となります。これからの農業士会並びに女性農業士の益々のご活躍をお祈りしております。



優雅に箏築（ひちりき）を奏でる
（左から3人め）

次代のため優良園地を作って後継者に

上富田町地域農業士

森 紳 一 郎



1. はじめに

私は高校卒業後、神戸の電機会社に就職し3年間勤務した後、21歳で地元へUターン就農しました。

当時の経営面積は地元の上富田町岡地区で110a、そのうち半分がみかん園、半分がうめ園でした。

就農してからは、うめを主体とした経営への転換と規模拡大を進めてきました。

2. 農業経営の方針と状況

就農以来、みかんとうめの栽培を続けてきましたが、みかん価格の低迷が続いたことと、適地適作を考えてみかんを減らし、うめへの改植を継続的に実施してきました。現在は食味の良い「ゆら早生」を10a栽培しています。

うめは「南高」が主体で、一部をJAに青梅として出荷していますが、ほとんどが漬けうめで、完熟果を収穫した後梅干しに加工し、加工業者に販売しています。

うめについては規模拡大を希望し園地を探したところ、2008年頃、知人の紹介により田辺市中辺路町栗栖川地区の新田パイロットにおいて、うめの栽培に適し且つ作業しやすい園地を60a借りることができましたので、園地整備・改植を行い、上富田町の園地と併せ、家族を中心とした農業に取り組んでいます。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
うめ	210a
極早生みかん (ゆら早生)	10a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用	8人

3. 今後の経営方針

私も65歳となり、今年3月末で農業士会の定年を迎えます。

近年、後継をどうしていくべきかと考えていたところ、娘の夫が「農業をする」と言ってくれました。

後継者の目途が立ったことから、将来「農業を継いでよかった」と思えるような園地を継いでほしいと考え、今後の経営方針を以下のとおりに決めました。

(1) うめ園地の若返り

既存の園地については、老木を伐採して計画的な改植を行い、園地の若返りを目指します。

(2) うめの更なる規模拡大と園地の整備及び改植

将来の経営安定のため、上富田町岡地区でみかん廃園を50a購入しました。

老木を伐採し、バックホーを導入して切り株を掘り起こし、全面的な園地整備及びうめへの改植を実施しています。

(3) 後継者の育成

うめ、みかんの栽培技術については、主に私が教えていますが、特にせん定などは難しく、技術の習得には時間がかかると思います。

幸いなことに、上富田町は若手の農家たちが後継者グループをつくっていて、研修・情報交換を行う他、せん定作業を請け負ったり、お互いの農作業を手伝い合ったりと経験を積む機会があります。

我が家の後継者もグループに入りましたので、今後、技術習得や同年代の仲間づくりに期待しています。

4. おわりに

これまでの自分の農業経営や農業士として活動を振り返って痛感していることは、農業を続けるためには、条件の良い園地が必要であるということです。

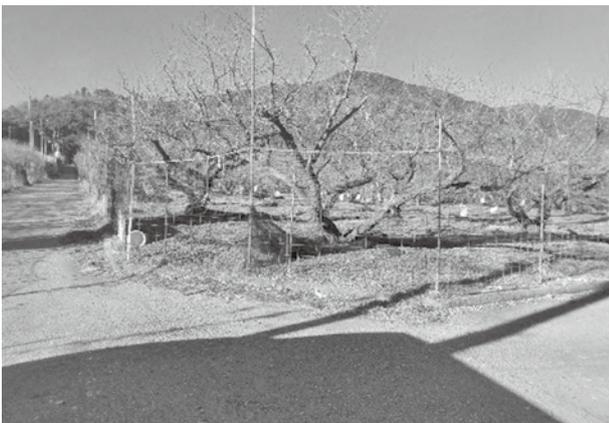
私は、山畑や急傾斜園といった悪条件のため、農業を続けられなくなった事例を見てきました。

そのため、規模拡大の際も条件の良いうめ園を探し、ご縁もあって今の園地に巡り合うことができました。

以上の経験により、現在は経営移譲を見据え、園地を若返らせ、安定した経営の見込める「農業を継いでよかった」と思える園地づくりと後継者の教育に取り組んでいます。

うめについては令和6年産は記録的な不作であり、7年産は不作に雹害が加わり新田パイロットのうめも大きな被害を受けるなど、厳しい状況が続いています。

令和8年産のうめは是非豊作になってほしいと思うとともに、今後、後継者たちが力を合わせ、地域の農業を守っていくことを願っています。



うめ園地（田辺市新田パイロット）



せん定作業



改植後うめ苗木



うめ若木

農業に懸ける想い

就農と今後の歩み

海南市 4Hクラブ
山下 芙都史



1. はじめに

私は、2023年から実家のみかん農家で親元就農し、今年で3年目になります。

それまでは高校を卒業してから民間企業に約7年勤め、途中約1年の転職二ト期間に日本全国を旅行しておりました。農業について全くの素人で、植物の成長が新鮮に感じる日々です。

2. 農業への想い・取り組み

自園は海南市下津町でみかん、柑橘類の生産、販売をしております。

農家として過ごすなかで、農業に携わる生産者の減少や高齢化が進む現場を顕著に感じる機会が多くなりました。

そうした中で、日本農業遺産、世界農業遺産に認定された歴史ある『みかん産地』をどう次世代に繋げていけるのか、地域の方々や県内外の方々と話し合う機会を増やしたいと想っております。

取り組みとしては、就農した当初に地域の先輩から4Hクラブに誘っていただき、現在では和海4Hクラブ、JA青年部、下津町農業研究同志会、和歌山県農業経営塾などを通じて積極的に全国の農業関係者の輪を広げております。

生産の取り組みとしては、来年度から自身で年間の生産、販売まで完結出来るよう取り組むと同時に設備投資や雇用、今後の栽培についての方向を決める予定で計画しております。

今後は自分自身が経験を積み、技術を磨くとともに、

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	245a
その他、柑橘類	65a
○労働力	
家族	3人
常時雇用（姉パート）	1人
臨時雇用	2人

に、これまでの繋がりを通じて『みかん産地』の振興に努めたいと考えています。



みかん園



橋本神社みかん祭

農業に懸ける想い

「我が家の農業」

紀の川市 地域農業士

駒井良成



1. はじめに

私は、タキイ園芸専門学校を卒業後、就農しました。もともとトマト中心の野菜農家でしたが、就農当時は花の単価もよかったので、少しずつ花を中心とした経営に切り替え現在に至ります。

2. 農業への想い・取り組み

就農した当時は、父母と私の家族3人でトマトやカーネーションの管理をしていました。

カーネーションを導入した頃は面積が20aありましたが、両親も年を取り、だんだんと手が回らなくなってきました。そこであまり手間のかからない金魚草やストックを栽培するようになりました。

これからは、私自身も年齢を重ねていきますので、雇用の形態を考えていくと共に、作業の分散化を図るため、新品目の導入を考えていきたいと思っています。

最近では、温暖化による夏の高温や、資材の高騰など今まで考えていなかったような問題が多くなり、栽培が年々困難となっているように思います。また、周辺では後継者がいないため、休耕田が増えてきています。そういった土地を活用し、

農業経営の概況

○作付品目と面積	
スプレーカーネーション	10a
金魚草	10a
ストック	20a
トマト	10a
ブロッコリー	15a
水稻	60a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用	2人

露地野菜を増やしていきたいと思っています。

課題は山積みですが、私自身出来ることを考えながら、紀の川市の農業を担っていきたいと思っています。



カーネーション栽培



金魚草栽培

農業に懸ける想い

自分に合った果樹栽培

橋本市 青年農業士

前谷 全孝



1. はじめに

私は建築関係の専門学校を卒業後、大阪府内の建築関係の会社へ就職し、サラリーマンとして働いていました。その後転職し、奈良県の農業法人に勤めていた経験から、自分が農業に合っていると考え、実家が兼業農家であったこともあり、2017年に地元に戻り就農しました。

現在は、橋本市で作り手のいなくなった園地や遊休農地を借り受け、柿、はっさく、温州みかんを栽培しています。労働力としては私と父が中心で、収穫期等の雇用が必要な時はパートを雇い経営を行っています。

2. 農業への想い・取り組み

就農当初は柿の栽培のみで、せん定も自己流で行っていましたが、地元の選果場の請負せん定に声をかけていただき、そこで一緒になった地元の農業士の方からせん定の方法など、いろいろと教えていただくことができました。今でもうまくいかないことも多いですが、自分で考え工夫できるところが楽しいと感じています。

規模拡大のため園地を探していたところ、たまたまはっさくの園地を借りることになり、それがきっかけでカンキツにも取り組むことになりました。3年前に元々水田であった近隣のまとまった遊休農地を新たに借り受け、はっさくの苗木を130本、温州みかんの苗木を160本植えました。温州みかんは、きゅうき、石地といった中生品種を中心に定植し、今年からある程度収穫できる見込みとなっています。



かき栽培園地



みかん栽培園地

農業経営の概況

○作付品目と面積	
かき	150a
刀根早生	100a
平核無	20a
富有	30a
はっさく	60a
温州みかん	30a
○労働力	
家族	2人
臨時雇用	3人

販売はJA出荷のほか、ECサイトや個人のHPでの販売を行っています。個人での販売は初めは注文がなく苦労しましたが、徐々にお客様から注文が入るようになり、軌道に乗ってきていると感じています。

今後は、柿の面積をこのまま維持しながら、温州みかんなどカンキツの面積を増やしていきたいと考えています。はっさくや温州みかんは、常緑果樹なので柿とは違った剪定方法が必要となるため難しい部分もありますが、県内のカンキツ産地の園地を参考にしながら、そういった技術面も身につけていきたいと思っています。

農業に懸ける想い

樹の本来の力に寄り添う

湯浅町 青年農業士

北村 真文



1. はじめに

私は大学卒業後、一般企業で2年勤め、その後平成24年に北村家の3代目として地元湯浅町で就農し今年で14年目になります。

就農当初は老木が多かったので樹の更新を進め、かん水用スプリンクラーの整備を行いました。今年から山を切り開き園内道を造成するとともに1園地1品種に絞り、作業のしやすい園地を作っています。

2. 農業への想い・取り組み

就農当初は、増収を図るため、園地拡大に注力していましたが、実際に園地を上げると、個々の樹に対して十分な時間をかけることが難しく、丁寧な管理が行き届かなくなりました。その結果、毎年安定的に着果せず、園地を増やすだけでは安定した収量を保つことは困難であると実感しました。園地拡大に伴い維持管理費が増え、みかんの生産コストが高くなるといった課題もありました。

そのような中、隣の園地で温州みかんを栽培されている先輩農業士さんの樹が、私の樹より小さいにも関わらず収量が多いことに大変驚かされ、理由を尋ねました。先輩は樹の性質に寄り添いながら、新しい芽が多く出るように管理し、樹1本毎の稼働率を高める工夫をされているとのことでした。先輩の助言を活かし、数年前から、新しい芽を毎年維持させるために、夏季に施肥し樹勢を保ち、摘果や剪定も工夫することで、樹の状態も改善されつつあり安定した収量が確保できるようになりました。

今後も、園地の面積は縮小する方向で維持管理費を抑え、先輩の助言のとおり効率の良い栽培方法を

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	280a
うち極早生	30a
早生	200a
中晩生	50a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用	4人

さらに進め、充実した樹を増やし、コンパクトだが収量を保つ園地作りをしていきたいです。

収穫時期には県外から大勢の方に応援に来ていただいています。またみかん狩りイベントやふるさと納税への出品等も行い、湯浅町を盛り上げる活動を彼らと一緒にしています。

農業を通じて出会った方々と交流する中で、農業や地域に関する新たな情報や知見を得る機会が増え、湯浅町の魅力を改めて実感しました。これからもみかんを通じて地元湯浅町の魅力を発信し続けていきたいと考えています。



コンパクトだが収量を保つ園地作り

農業に懸ける想い

スマート農業へのチャレンジ

印南町 地域農業士

長井利憲



1. はじめに

私は、農大を卒業後、2年間JAで働いたのち親元で就農しました。

現在は、ハウスでミニトマトを栽培しており、JAの部会を通じ赤糖房（あかとんぼ）のブランド名で出荷しています。

2. 農業への想い・取り組み

親元に就農した当初は、親から言われた作業をこなすだけで、作業も楽しくなく、農業をするのが大変でした。

しかし、5年ほど前から本格的に経営を継ぐようになって、せっかくやるからにはと県主催のスマート農業塾に参加してみるなど、いろいろと試行錯誤するようになりました。

特に、CO₂施用をすることで、収量が大幅に伸びたことが、自分の栽培に手ごたえを感じるきっかけとなりました。色々やれば、植物は答えてくれると感じ

農業経営の概況

○作付品目と面積	
ミニトマト	17a
○労働力	
家族	2人
臨時雇用	1人

るようになり、農業が楽しくなってきました。

最近では、効果的な施用のためにダクトを設置してみたり、受光をよくするため誘引方法を変えてみたり、新たなことにチャレンジしています。

近年は異常気象で、栽培が難しくなっていますが、環境制御技術などを駆使しながら、そのような環境にも負けず、食べた人においしいと言ってもらえるブランドミニトマトを安定的に出荷し、産地を盛り上げていきたいと考えています。



CO₂ 発生機



ダクトによる施用

農業に懸ける想い

規模拡大と園地の改善により、 効率的な農業を目指す

上富田町 青年農業士

森 夏 輝



1. はじめに

私は農家の長男として生まれ、両親や教師の勧めもあり、高校卒業後は和歌山県農業大学校（現・和歌山県農林大学校）へ進学しました。学校ではみかんを専攻し、卒業後すぐに就農しました。

我が家では主に父と私の2人で仕事をしており、農繁期を中心に臨時雇用しています。

2. 農業への想い・取り組み

就農時の経営面積は温州みかん 100a、うめ 50a でしたが、就農直後から規模拡大を進めてきました。しかし、借りられる園地は老木園や廃園など条件の良い園地が多いことから、うめ、みかんの計画的な改植を進めるとともに、バックホーを購入して園内道の設置等の園地整備を継続的に実施することで、規模拡大と機械の入る作業効率の良い園地づくりの両立を目指しています。

栽培品目については、うめは「南高」、温州みかんは極早生、早生温州が中心です。

うめは主に完熟落果を出荷しています。作業効率改善と収量増のため、樹高を低めにするせん定を心掛けると共に、2024年から一部で摘心処理を導入しています。

温州みかんの品種構成は「YN26」20a、「ゆら早生」



うめ園（若木）



みかん園



整備した園内道

農業経営の概況

○作付品目と面積	
うめ	400a
温州みかん	150a
○労働力	
家族	2人
臨時雇用	延べ 150～200人/年

30a、「日南の姫」20a、「日南一号」30a、「田口早生」50aであり、このうち「日南の姫」はコープこうべフードプラン「上富田みかん」として、「日南一号」と「田口早生」はJAわかやまのこだわりグループとして、高品質を重視するグループ出荷をしています。

近年、鳥獣害が増加しているため、私も罾の免許を取得しました。上富田町では比較的若手の農家や後継者がいる地域で、後継者のグループをつくっており、研修や情報交換を行うだけでなく、お互い手が空いたときに農作業を手伝い合うなど、活発に活動しています。

就農してから規模拡大と園地の整備に励んできましたが、改植した苗木が成長し、結実が近くなってくると収穫が楽しみになり、農業がより面白く感じられるようになったと思います。今後も地域の人たちと協力し合って農業に取り組んでいきたいと思っています。

県農林大学校生です。

～農林大学校1年生の自己紹介&近況報告～

農学部 園芸学科



副島 佑介

兵庫県神戸市出身の副島佑介です。祖母が和歌山で農業をしていることと、私自身果物を食べるのが大好きだったので、ここで果樹について学びたいと思い、入学しました。

将来は祖母といっしょに農業をして、モモやミカンなどを育てていきたいと考えています。そのためにも、この学校で果樹について学び、その知識や経験を将来活かしていきたいです。難しいことや大変なことも多いですが、その分楽しいこともあるので、自分なりにがんばっていききたいです。

.....

私は有田川町出身で、有田中央高校を卒業しました。私の家は、父が祖父母と一緒にみかん農家をしています。

私が農林大学校に入学した理由は、小さい頃からみかんの収穫を手伝っていたこともあり、みかん農家を継ぎたいと考えたからです。

農林大学校を卒業後は、社会経験を積みたいこともあり就職を考えています。しかし、最終的には家のみかん農家を継ぐことを決めています。そのため、みかんの知識や技術を農林大学校で身に付けたいと考えています。

.....



築山 大河

私は御坊市出身で、紀央館高校を卒業しました。

農林大学校に入学しようと思ったきっかけは、祖父母が農業をしており、小さい時から農業を体験していて楽しいと感じた経験を通じ、もっと深く学んでみたいと思ったからです。

卒業後は、祖父母の農業を引き継ぎたいと考えています。

農林大学校では野菜コースを専攻しています。農業とは関係ない高校を卒業しているため知識はほぼありませんが、この2年間の日々の授業や実習で基礎的なことから、少しずつ学んでいきたいです。

.....



津村 隼希

私は、和歌山県御坊市出身の藤原史です。

私は何故農大に入ったかということ、私は元々南部高校の食と農園科出身で、農業のことを学んできて、農業というものに興味が沸きもっと詳しく農業を知りたいと思ったからです。

私の将来の進路希望は JA や農業関係の仕事に就職したいと考えています。

農大で頑張りたいことは、私は、勉強が苦手なので進級や卒業ができるのかが心配ですが、できる限りとれる資格などを取ってなおかつ勉強を頑張っていきたいです。



藤原 史



山畑 明日菜

私は大阪市出身で、大阪の農業高校で農業を学んでいました。昔からみかんなどを食べるのが好きなのと、体を動かすのが好きなのもあって、将来この二つが活かせる職業が農業だと思い、もっと農業について学びたくて、みかんが有名な和歌山県にある和歌山県農林大学校に進学しました。

学校での実習に加え、実際に農業研修に行ったりと様々な経験をしました。確かに農業は辛いことや大変なことは多いですが、これからもこの学校で新しい体験や経験を積んで、たくさんの方を学んでいきたいなと思います。

将来はこの学校で学んだことを活かし、農業関連の職に就きたいです。

.....

私は和歌山県の上富田町にある熊野高校を卒業しました。ここでは、ミニトマトを研究しました。研究をしているうちにミニトマトについてもっと知りたいと思い特別推薦を選びました。和歌山県農林大学校を卒業後は、就職して新規就農の資金調達をしたいです。その後、トマト農家として新規就農をしたいと思います。

農林大学校では、新規就農をした後、自分で播種から収穫までの作業ができる技術を身につけたいです。また、経営が自分である程度できるように、少しの知識を付けて卒業したいです。

そして、和歌山県の農業に貢献できるように農園を大きくして、トマトの流通量を増やしたいと思います。

.....



山本 悠介

私は和歌山県白浜町出身で南部高校を卒業、農大に入学した横畑光洋です。私がこの和歌山県農林大学校を選んだ理由は高校で果樹を学び、さらに発展した内容を学ぶためです。

農大で頑張りたいことは、日々の実習では周りをよく見て集中して行うことです。また、高校では習えなかったことを学び二年間頑張りたいです。私は「わかやま農業教育一貫プロジェクト」で梅のプロジェクトで入学したので、プロジェクト学習では梅を研究し将来に役立てたいです。

将来はJAや農業高校の実習助手などの農業関係の仕事に就きたいです。



横畑 光洋

農学部 アグリビジネス学科

私は島根県出身で、農業系の高校を卒業しました。

梅が大大大好物で、小学生の頃に初めて曾祖母の梅干しを食べたときの衝撃は今でも忘れません。「こんなに美味しいものがあるのだ！」と、感動し、私はこの瞬間に「一生梅に関わる仕事がしたい」と強く思いました。そして、梅農家になることを決意しました。

梅といえば、やはり和歌山県が真っ先に思い浮かび、和歌山県農林大学校への進学を決めました。

卒業後は、六次産業化に挑戦し、アグリビジネス学科で培った経営スキルを活かしたいと考えています。そして、世界に通用する梅酒を作るのが夢です。



飛田 統羽

.....

試験研究レポート

REPORT

県オリジナル中晩柑 ‘はるき’ の 幼木・着果・貯蔵管理技術

和歌山県果樹試験場 栽培部 副主査研究員 前田 公博

1. はじめに

‘はるき’（写真1）は当場が育成した中晩柑で、糖度13～14度程度、サクサクした食感が特徴の品種です。ウンシュウミカンに続く3月出荷が可能な、品種として期待されますが、品種特性を踏まえた適切な栽培管理が必要です。また、有利販売のために、カンキツの流通が少なくなる4月以降に出荷するための貯蔵管理技術も求められています。そこで、幼木管理・着果管理および貯蔵管理技術の確立に取り組みました。

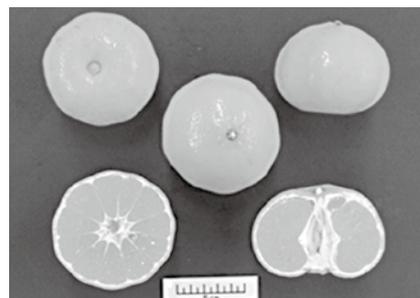


写真1 ‘はるき’ 果実

2. 試験研究の結果

(1) 苗木の早期樹冠拡大のための枝梢管理方法について検討した結果、新梢長あたりの乾物重は枝梢処理区（前年秋梢基部の直下で切り返しを行い、新梢発生後は1節あたり1本に芽かきを行った。摘心は先端以外の枝に対し、春枝では8～10葉、夏枝では10～12葉程度で行った。）で重い傾向を示し（図1）、枝の充実度や太さの点では一定の効果が認められました。一方、放任管理とした場合、根乾物重および総新梢長が枝梢処理するよりも大きく、特に地下部の生育が促進される傾向が認められました（図2）。

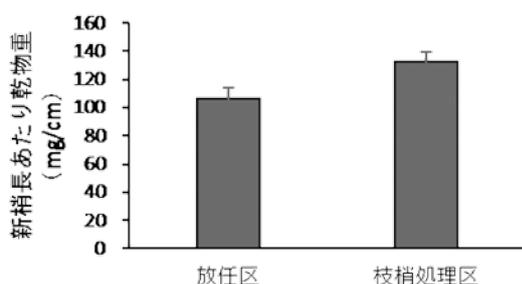


図1 新梢長あたり乾物重の比較
注) 図中のバーは標準誤差 (n=3)
枝梢処理: 切り返し・芽かき・摘心

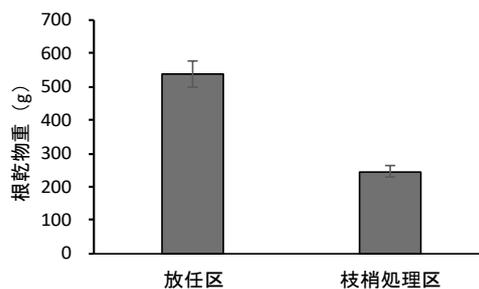


図2 根の乾物重比較
注) 図中のバーは標準誤差 (n=3)
枝梢処理: 切り返し・芽かき・摘心

(2) 葉果比80、120及び160の3区を設け試験を行いました。80区では、1年目は果実が小さい傾向を示し、着果数が多いため収量は多くなるものの、翌年は着花数が減少し大果となるなど、隔年結果の兆候が認められました。160区では大果になるものの着果量が抑制され収量が減少する傾向が見られ、120区では80区と160区との中位的な傾向が認められました（図1、3）。以上から‘はるき’では、葉果比120程度を目安に摘果を行うことで、果実サイズ、品質および収量のバランスが保たれ、連年安定生産が可能になると考えられました。

表 1 試験 1 年目の果実品質及び収量 (2023 年 2 月 22 日)

葉果比	横径 (mm)	果形指数	果実重 (g)	糖度 (Brix)	クエン酸含有率 (%)	収量 (kg/m ³)	収量 (果/m ³)
80	70.9	122.2	149.8	14.3	1.64	3.29	22.0
120	74.4	113.1	167.6	13.3	1.30	2.64	17.1
160	73.4	118.1	166.2	13.2	1.32	1.28	7.6

注 1) 調査果実数: 1 樹あたり 10 果調査 (n=3)

注 2) 果形指数 = (横径 / 縦径 × 100)

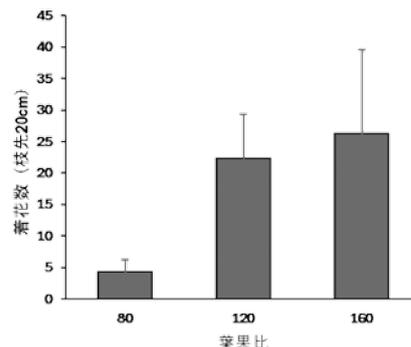


図 3 葉果比設定 2 年目の着花数 (2023 年 5 月 12 日)

注) 図中のバーは標準誤差 (n=3)

(3) 収穫後、常温貯蔵中に生じる障害果 (しなび、へた枯れ、コハン症、腐敗果) の発生を抑制するためには、MA 資材 (商品名:P- プラス) による個包装またはコンテナ単位での包装が有効でした (表 2、写真 2)。ただし、貯蔵温度が上昇する 4 月以降には包装の有無に関わらず障害果の発生が急激に増加しますので、常温貯蔵を行う場合は 3 月末までが限度です。

なお、冷蔵 (8℃) 下で貯蔵を行うことで、貯蔵期間を常温よりも 1 か月程度延長することが可能です (データ省略)。

表 2 貯蔵中の障害果発生率の推移 (常温貯蔵)

障害名	包装	発生割合 (%)				
		3/12	3/29	4/16	4/30	5/15
しなび	MA 個装	-	0.0	0.0	0.0	0.0
	MA コンテナ	-	0.0	0.0	0.0	9.0
	無処理	0.0	1.1	19.7	40.8	67.1
へた枯れ	MA 個装	-	0.0	12.2	14.3	18.8
	MA コンテナ	-	0.0	19.3	32.5	43.3
	無処理	1.1	3.3	18.6	58.0	88.2
コハン症	MA 個装	-	1.1	6.0	8.4	12.9
	MA コンテナ	-	4.4	20.4	31.1	44.8
	無処理	1.1	6.7	8.0	11.1	15.3
腐敗果	MA 個装	0.0	0.0	8.3	15.4	40.0
	MA コンテナ	0.0	0.0	2.6	10.8	29.3
	無処理	0.0	1.1	5.4	16.6	43.8



写真 2 MA 資材でコンテナ包装

注) 収穫日: 2024 年 2 月 26 日、貯蔵期間: 3 月 12 日~5 月 15 日

予措期間: 2 月 26 日~3 月 12 日 (果実重量が 3%程度減)

3. まとめ (成果のポイントと活用)

(1) ‘はるき’ は、定植後 2~3 年程度は切返し・芽かき・摘心等の枝梢管理を控え、放任的に管理することで根量の増加と樹体拡大を優先させ、その後に樹形形成を目的とした枝梢管理へ移行することが、早期成園化を図るうえで有効です。

(2) ‘はるき’ の摘果は、葉果比 120 程度を目安として、7 月上旬の粗摘果 (葉果比 100 程度) および 8 月上旬の仕上げ摘果 (葉果比 120 程度) の二段階に分けて行いましょう。

(3) ‘はるき’ の貯蔵期間は、常温貯蔵の場合は 3 月末まで、冷蔵貯蔵を行う場合でも 4 月末までとしてください。

試験研究レポート

REPORT

冬季の実エンドウハウスにおける既存設備を利用した 制御方法がハウス内温湿度に及ぼす影響

農業試験場暖地園芸センター 園芸部 副主査研究員 山野智輝

1. はじめに

実エンドウの秋まきハウス冬春どり作型では、冬から春にかけて品質不良莢や病害が発生してきます（図1）。これらを防ぐには、日中の気温を13℃以上に保ちながら、湿度が90%を超える時間をできるだけ短くすることが大切です。

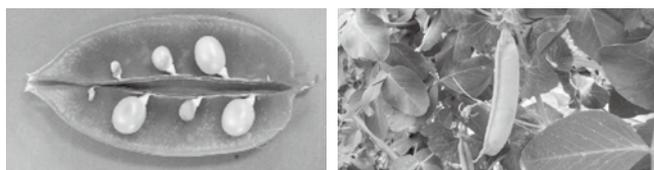


図1 品質不良莢（左）と病害発生莢（右）

ここではハウス内環境の改善を目指して、既存の設備を利用した換気や加温方法が、気温や湿度に及ぼす影響を調査した結果を紹介します。

2. 試験方法

試験区には設定した時間に側窓を開閉し、加温機の設定温度を2℃とした「慣行区」、側窓による換気方法を制御した「終日開放区」と「温度制御区」、雨天日の高湿度対策として加温方法を制御した「間欠加温区」を設けました（表1）。試験は所内の単棟パイプハウス（間口8.0m、奥行20.0m、棟高3.8m）で実施し、ハウス内およびハウス外の温湿度の推移を測定しました。

栽培方法は、2024年9月26日に播種し、産地の慣行に準じて実施しました。

表1 各試験区の制御方法と実施日の環境データ

試験区	制御方法	
	換気	加温
慣行	8:00~16:00;全開, 16:00~8:00;全閉 (全開時は50cm開放)	設定2℃
終日開放	15cm 20cm	設定2℃
温度制御	注) 設定温度 5℃、感度2℃、開度10割(最大50cm開放) 設定温度10℃、感度2℃、開度10割(最大50cm開放)	設定2℃
間欠加温	11:45~15:00;10cm開放	12:00~14:00;モヤコンバーナー稼働 (設定;5分作動、10分停止の繰り返し)

注) 感度…5段階制御の1段階開閉動作するまでの温度幅
(例) 設定温度5℃、感度2℃の場合、5℃で10cm開放、7℃で20cm開放…、13℃で50cm開放(全開)
開度…5段階制御の全開位置(設定範囲1割~10割)

3. 結果

(1) 慣行管理の特徴

日中のハウス内気温は、晴天日ではエンドウの生育に適した15~20℃程度で推移しました（図2）。一方、雨天日は15℃未満で、外気温とほとんど差がありませんでした（図3）。夜間は、晴天日にはハウス内の方が

外気温より低く、逆に雨天日は外気温より高くなりました。

ハウス内湿度は、晴天日では90%以下で推移しましたが、側窓を閉めた後は約90%まで上昇しました。一方、雨天日は日中も湿度が高い状態が続きました。

(2) 側窓を終日開放したときの特徴

側窓を終日開放すると、夜間のハウス内気温は、慣行管理同様、外気温より低くなるものの、ハウス内外の気温差は小さくなりました(図4)。また、湿度は夜間でも90%以下になりました。

晴天日の日中のハウス内気温は、側窓の開放程度による影響が大きく、15cmの開放では外気温が10℃程度の低温の日でも、ハウス内気温を

20℃に保つことができました(図4)。

(3) 側窓を温度制御したときの特徴

電動カンキット(東都興業株式会社)を使用して、側窓を自動で開閉しました。開放の設定温度5℃では、ハウス内気温が上昇し始めるのは10時以降でしたが(データ省略)、設定温度を10℃にすると、8時頃から上昇し始めました(図5)。このように設定温度を高くすると、早い時間帯からハウス内の気温を確保できました。

また設定温度10℃では、ハウス内気温が10℃を超えると同時に、側窓の開放により湿度が下がりました。エンドウの病害は10~20℃で湿度が高い条件で発生しやすいため、気温が上がるタイミングで側窓を開け湿度を下げることで、病害の発生を防ぐことができると考えられます。

(4) 間欠加温したときの特徴

雨天日の12時から14時に多段サーモヤコン(ネポン株式会社)を使用して、間欠加温を実施した結果、ハウス内気温が上昇するにつれ湿度の低下が確認され、外湿度よりも低くなりました(図6)。

4. おわりに

冬季の実エンドウハウスで換気、加温方法の違いによる温湿度制御の効果を検証しました。慣行管理では、晴天日はハウス内を15℃程度に維持できましたが、雨天日は日中も15℃未満になりました。また、側窓を閉めると湿度が90%近くになり、病害の発生リスクが高まりました。一方、側窓を終日開放すると、夜間も湿度を90%以下に抑え、開放程度を調整すれば、日中の気温が低い日でもハウス内を適温に保つことができました。自動換気装置による温度制御では、設定温度の調整により朝早くからハウス内気温を確保でき、同時に湿度も下げられました。雨天日の間欠加温では、ハウス内気温を上昇させ、湿度は外気より低下させることができました。

今後は、これらの方法を組み合わせた環境制御を実施し、収量・品質への影響を検証することで、実エンドウの品質向上と病害抑制を目指します。

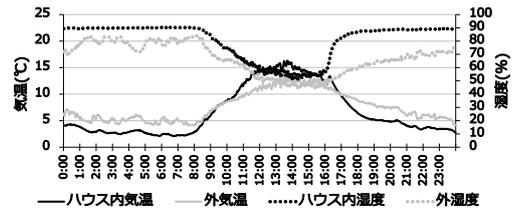


図2 慣行管理した時のハウス内外の温湿度
実施日: 2025年1月21日、天候: 晴れ(降雨量0.0mm)
外気温の最高13.4℃、最低4.1℃、日照時間9.3h

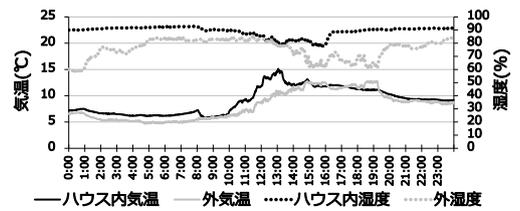


図3 慣行管理した時のハウス内外の温湿度
実施日: 2025年3月4日、天候: 雨(降雨量3.0mm)
外気温の最高12.8℃、最低4.7℃、日照時間0.0h

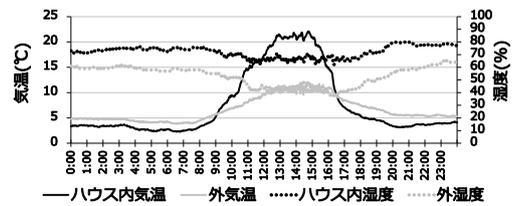


図4 終日側窓を15cm開放した時のハウス内外の温湿度
実施日: 2025年1月26日、天候: 晴れ(降雨量0.0mm)
外気温の最高12.1℃、最低3.8℃、日照時間8.6h

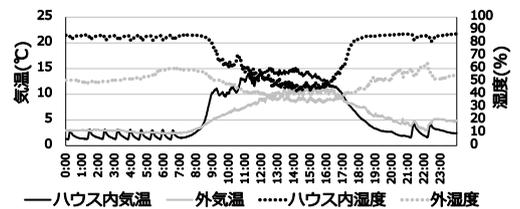


図5 側窓を設定温度10℃、感度2℃、開度10割で制御した時のハウス内外の温湿度
実施日: 2025年2月14日、天候: 晴れ(降雨量0.0mm)
外気温の最高11.8℃、最低2.3℃、日照時間10.0h

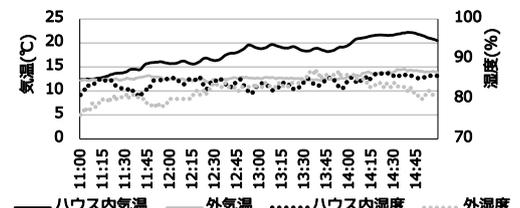


図6 間欠加温した時のハウス内外の温湿度
実施日: 2025年4月2日、天候: 雨(降雨量2.5mm)
外気温の最高14.6℃、最低10.5℃、日照時間0.2h

試験研究レポート

REPORT

ウメのモモヒメヨコバイの発生生態と防除対策

果樹試験場うめ研究所 研究員 裏垣 翔野

1. はじめに

モモヒメヨコバイは、成虫および幼虫がウメ等のバラ科樹木の葉を吸汁加害するヨコバイ科の一種です。2019年9月に県内のウメで初めて被害が確認されました。本種による吸汁被害は光合成速度の低下や早期落葉を引き起こし、樹体の生育への悪影響が懸念されます。そこで、本種の発生生態およびほ場での薬剤による防除効果を調査しました。

2. 試験研究の内容・結果等

(1) 成虫の誘殺消長（試験1）

田辺市の慣行防除ほ場およびみなべ町の無防除ほ場（うめ研究所内）で、発芽期の3月から落葉期の12月まで、各園地で3か所ずつ黄色粘着トラップを設置しました。トラップは約10日間隔で交換し、誘殺された成虫数を計数しました。その結果、慣行防除ほ場では誘殺数が3月下旬に最も多く、4月上旬以降は低く推移しましたが、7月上旬以降に再び増加しました（図1）。一方、無防除ほ場では年4回のピークが確認され、3月下旬、8月中旬に多く誘殺されました（図2）。4月中旬以降は低く推移したものの、6月中旬以降に再び増加しました。

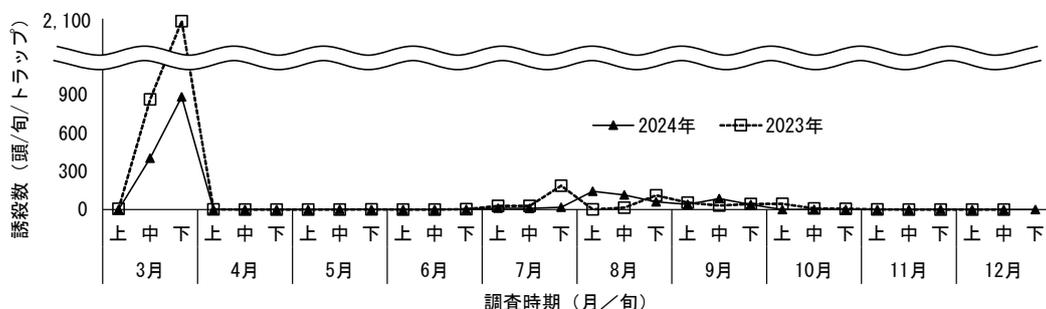


図1 2023、2024年の慣行防除ほ場におけるモモヒメヨコバイ成虫の誘殺消長

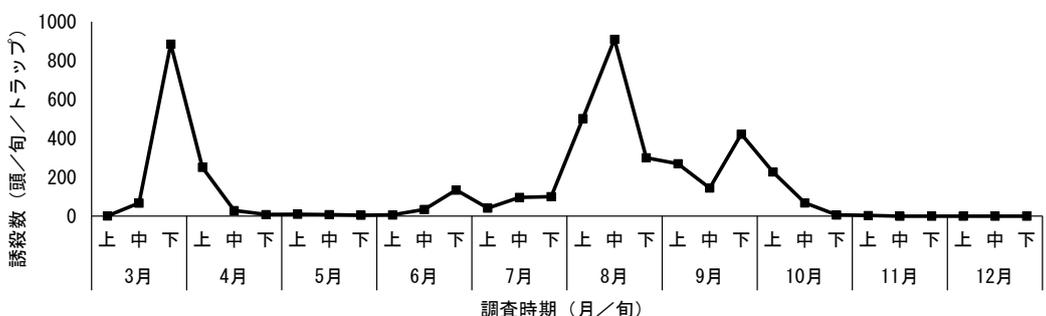


図2 2024年の無防除ほ場におけるモモヒメヨコバイ成虫の誘殺消長

(2) 葉上の成虫および幼虫の発生消長、被害程度の推移

上記(1)と同一の慣行防除ほ場および無防除ほ場において、ウメの展葉後から落葉するまでの期間、約10

日間で 300 葉を吸汁被害面積別に 5 段階の被害度（0：葉の吸汁被害面積 0%、1：同 1-25%、2：同 26-50%、3：同 51-75%、4：同 76-100%）に分類し、寄生成幼虫数を調査しました。両ほ場ともに寄生成幼虫数が 7 月以降に増加し、幼虫数の増加後に被害程度が高まる傾向が認められました。慣行防除ほ場では、幼虫数が 8 月上旬の防除後に減少したものの、8 月下旬から 9 月上旬まで増加しました（図 3）。無防除ほ場では、慣行防除ほ場よりも早い時期から被害程度が高まり、10 月には落葉しました（図 4）。

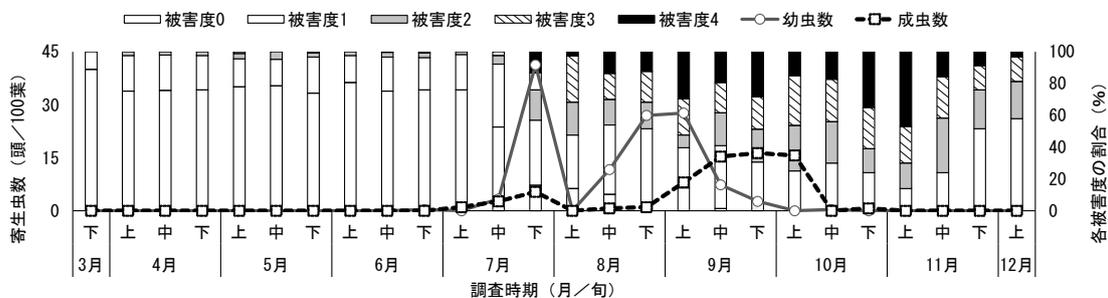


図 3 2023 年の慣行防除ほ場におけるモモヒメヨコバイ発生消長および被害程度の推移

注) 寄生成幼虫数（折れ線グラフ）は左側の縦軸、各被害度の割合（積み上げ棒グラフ）は右側の縦軸と対応
矢印は 3 月下旬以降の殺虫剤の散布時期を示す

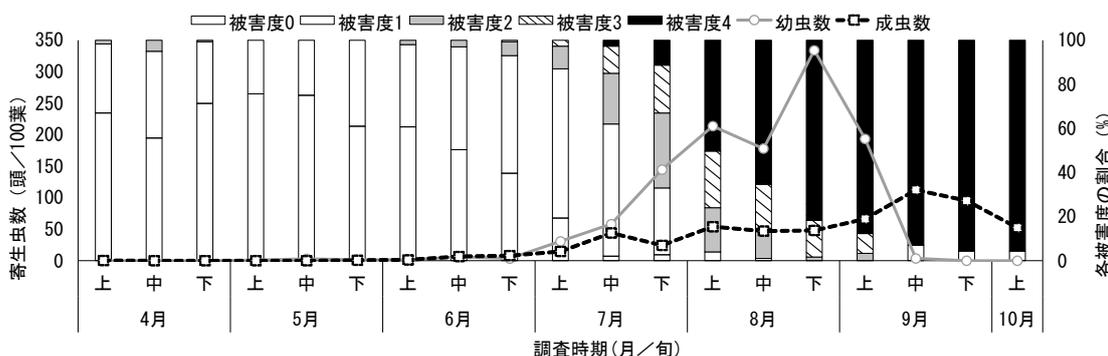


図 4 2024 年の無防除ほ場におけるモモヒメヨコバイ発生消長および被害程度の推移

注) 寄生成幼虫数（折れ線グラフ）は左側の縦軸、各被害度の割合（積み上げ棒グラフ）は右側の縦軸と対応

(3) 各種殺虫剤の防除効果

2024 年 8 月に各種薬剤を 3 樹ずつに散布し、散布前後に 1 樹あたり 50 葉に寄生する幼虫数を計数しました。いずれの薬剤も処理 7 日後まで幼虫数を低密度に抑えることができました。その後、モスピラン顆粒水溶剤以外の薬剤では、処理 14、21 日後に再び密度が高まりました（図 5）。なお、モスピラン顆粒水溶剤は 2026 年 1 月時点で本種に対する登録がないため、注意が必要です。

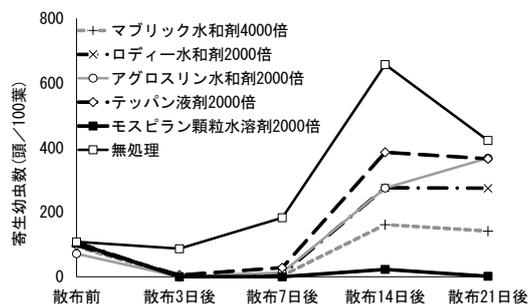


図 5 モモヒメヨコバイに対する各種薬剤の防除効果

3. まとめ

本研究の結果によると、モモヒメヨコバイはウメの発芽期に成虫がほ場に飛来し、夏季に寄生密度が高まりました。慣行防除ほ場では、収穫期までの薬剤防除により 6 月頃まで低密度に維持できますが、7 月以降に多発する傾向があるため、発生状況に注意し、寄生密度が高まる前に薬剤を散布しましょう。ただし、本種は発生が長期に渡り、薬剤防除後も再び密度が高まる場合があるため、継続的に発生状況に注意しましょう。

令和7年度和海地方農業士会活動

海草振興局 農業水産振興課

1. 和海地方農業士会が総会を開催

4月18日、「紀三井寺ガーデンホテルはやし」において、和海地方農業士会が令和7年度の総会を開催し、会員27名が出席しました。総会では、令和6年度の活動報告や会計報告、令和7年度の活動計画、役員改選などの各議案が審議され、いずれも承認されました。なお、役員改選に伴い、新会長には南方一誠氏が就任しました。

総会後には活動報告会が行われ、まず理事の山本達弥氏から、県農業士会が実施した奈良県視察研修会への参加報告が行われました。報告では、有機農業を実践している宇陀市「山口農園」の、リスクヘッジの観点から葉菜類周年栽培に取り組んでいる状況や、中古ハウス資材を再活用して初期投資や維持コストを抑える工夫などが詳しく紹介されました。続いて、岩橋信博普及指導員からは、和海地方農業士会が実施した視察研修についての報告があり、京都府伊根町の「株式会社向井酒造」や亀岡市の「JA京都たわわ朝霧」での取組が共有されました。

すべてのプログラム終了後には懇親会が開催され、会員同士による情報交換の場として大いに活気づきました。参加した会員からは、それぞれの営農状況などについて熱心に語り合う姿が見られ、世代や品目の垣根を越えた活発な交流が行われました。地域農業のリーダーとしての自覚を新たにし、互いに刺激し合いながら親睦を深めたこのひとときは、新年度の活動に向け大変有意義な機会となりました。



総会



奈良県視察研修会への参加報告

2. 和海地方農業士会が県外研修を実施

9月26日、和海地方農業士会（会長：南方一誠氏）は、大阪府内の2か所で研修会を実施し、会員6名が参加しました。

まず、泉佐野市の「JA大阪泉州農産物直売所こーたり〜な」では、直売所の運営状況について説明を受けました。会員らは出荷物の価格設定や安定した品ぞろえへの取り組みに熱心に聞き入り、活発な質疑応答や意見交換が行われました。

次いで訪れた堺市の「アルスコーポレーション株式会社」では、せん定鋸（のこ）やせん定ばさみの一貫生産体制に加え、製造機械まで自社開発している点について説明を受け、工場も見学しました。ここでも刃物のメンテナンス方法や、ユーザー目線での商品提案をめぐって議論が盛り上がりました。

本研修を通じて、大規模直売所の運営ノウハウと、老舗刃物メーカーの高品質なものづくりへのこだわりを深く学ぶ機会となりました。



JA大阪泉州農産物直売所こーたり～なの店内



アルスコーポレーション株式会社での研修

3. 下津町農業士会の「みかん出前授業」

下津町農業士会（会長：上森培弘氏）は、将来を担う子どもたちに下津みかん産地の現状や課題、農業の魅力を学んでもらうことを目的として、毎年、地元の下津第二中学校で出前授業を行っています。

今年は11月10日に開催され、2年生29名が体育館に集合し、農業水産振興課のスライド説明や農業士との質疑応答を通じて、みかんづくりや産地に関する知識を深めました。みかん産地の中学生といっても、今では農家の子弟はほとんどいないため、普段見ている景色が世界農業遺産に認定されていることや、地元が世界に誇る産地であることに驚いた様子でした。

農業士がおいしいみかんの見分け方を説明すると、生徒たちは興味深く聞き入り、その後の試食で大いに盛り上がりました。また、グループ討議では、みかんの消費拡大や農業者の確保、下津みかんのPRについて熱心に意見交換しました。

感想文では「自分の町のいいところを世界に認めてもらえてうれしい」、「この和歌山のみかんを多くの人に知ってもらいたい」、「グループワークで友達と楽しく考えられた」といった声が寄せられ、地域への誇りや共同作業の重要性を再認識したことが伺えました。今回の授業をきっかけに、生徒たちが豊かな心を育み、将来の産地を支える存在となっていくことが期待されます。



みかんと世界農業遺産について説明



グループ討議結果を発表

那賀地方における農業士活動

那賀振興局 農業水産振興課

那賀地方農業士会（会長：小川真司氏）では、各市農業士会での活動を中心に、年に一度技術研鑽と交流を兼ねた視察研修を行っています。

1. 岩出市農業士会現地研修会の開催

令和7年1月28日に、現地研修会を開催しました。今回は、奈良県の農業研究開発センターを訪問、担当者から奈良県における農業技術の研究開発システムやそれぞれの研究部門の取り組み状況について説明を受けました。

その後、花き及び野菜の試験圃場等を見学し、花きでは鉢物の栽培や輸出用の枝物栽培の研究について、野菜では、研究課題のイチゴの育種や栽培方法について説明を受けました。



農業研究開発センター全体の説明を受ける会員

2. 那賀地方農業士会の県外視察の開催

令和7年2月27日、淡路市でたまねぎ（栽培面積14.2ha）を専作している（株）池上農園を視察しました。（株）池上農園は、竹の有機資材を使用してする特別栽培に取り組んでいる他、補助事業を活用した冷蔵設備を整備し、小売業者等に周年で直接販売を行っています。生産現場での農作業は、技能実習生が担っていました。



みかん畑を園地改造した玉ねぎ畑



女性経営者と交流する会員

会員からは、栽培技術だけでなく、ほ場整備の方法、補助金活用、資金繰りや雇用管理に関する様々な質問がありました。また代表者が女性ということもあり、女性会員も積極的に質問していました。

3. 那賀地方農業士会女性部会研修・交流会の開催

令和7年10月31日に、研修・交流会を開催しました。

昨年度の情報交換会で会員の特技を皆で教えあおうという意見があり、今回は、地域農業士の高井恵美氏から、コースターづくりを教わりました。

コースターづくりのあとは、台丸谷会長の手づくりお菓子とハーブティーを頂きながら、お互いの近況や農作業の話など様々な話をしました。

また、それぞれの農繁期が違うため、実際に集まり交流をする機会が少ないことから、通信アプリのグループチャットを活用して、誕生日月に近況報告を行っていくことになりました。



交流会の様子



会長手づくりのお菓子

4. 紀の川市産業まつりへの参加

令和7年11月23日に「紀の川市産業まつり」が開催され、紀の川市農業士会が参加しました。

今回はいつもと趣向を変え、会員が生産した野菜や果物を盛り合わせた農産物（6種類）の重量当てクイズを行いました。ピタリ賞とニアピン賞を設け、正解者には農産物をプレゼントしました。また、クイズで使用した野菜や果物を使用したレシピや、農業士会の活動PRチラシを配布しました。

4回の開催で延べ400名の方が参加する大盛況で、消費者と直接ふれあえる良い機会となりました。



重量当てクイズの開催風景

伊都地方農業士連絡協議会のとりくみ

伊都振興局 農業水産振興課

1. 県外研修会の開催

令和7年2月13日木曜日、農産物の売れ筋の傾向や人材育成のノウハウを農業経営に活かすため、県外研修を開催し会員12名及び振興局担当者が出席しました。

大果大阪青果株式会社果実部では、和歌山担当の木村部長から和歌山柿のトップバッターである中谷早生は、その後の品種の単価を安定させるために重要な商材との説明がありました。しかし軟化が問題であり、廃棄ロスやその後の品種への影響を考えると、コストをかけてでもスマートフレッシュ処理（1-MCP）により軟化を防止し、早期に売り場を作ることが重要とのことでした。また、本県オリジナル品種「紀州てまり」については、育成当初は10月中に収穫のできる品種として魅力的でありましたが、現在は収穫時期が11月に入ることが多く、さらに渋果も混在するなど問題点が多くなっています。富有柿に代わることでできる品種でなければ将来性はないとの厳しい言葉をいただきました。

また、大阪府富田林市の乾農園では、約2haでナス、キュウリ、海老芋などを栽培されていますが、外国人5名を含む従業員11名を雇用されています。代表を務める乾裕佳さんは、ご主人との死別、父親が認知症を発症するなどの苦難に会いながら、受け継いだ農地を守るためにも、新規就農者を育成するための「農業塾」の立ち上げに関わるなど、地域ぐるみの後継者育成にも積極的に取り組まれていました。これらの取り組みが認められ、大阪府から「農の匠」に認定されています。



乾農園代表から経営概要の説明



ほ場見学

2. 令和7年度伊都地方農業士連絡協議会総会、研修会の開催

令和7年4月16日水曜日、伊都振興局において、伊都地方農業士連絡協議会総会及び研修会を開催しました。

総会に先立ち、来賓挨拶に続き、定年解除になった指導農業士への記念品贈呈、また新たに認定された農業士の紹介を行い、それぞれ今後の抱負を述べて頂きました。



知事感謝状交付



新規農業士認定者から抱負

総会では、平木橋本市長、小倉JAわかやま紀北地域本部長ら来賓7名及び会員15名出席の下、全ての議題が原案どおり承認されました。



会長挨拶



総会の様子

研修会では、かき・もも研究所の岡橋副主査研究員を講師に招き、大果大阪青果株式会社での研修で重要性を学んできた「1-MCP（商品名：スマートフレッシュ）」について、その効果と仕組みを詳しく説明頂きました。

会員らはスマートフレッシュ処理の重要性について熱心に聞き入っていました。



研修会の様子

有田地方農業士協議会の活動

有田振興局 農業水産振興課

有田地方農業士協議会（会長：上野山和広氏）では、地域農業振興のため、農業経営や栽培技術等に関する研修会や講演会を開催し、自己研鑽や会員相互の親睦を図っています。

1. 有田地方農業士協議会研修会

令和7年4月17日の有田地方農業士協議会総会後に開催した研修会には、会員及び関係者46名が出席しました。まず、「カンキツにおけるスマート農業技術の開発と展望」と題して農研機構果樹茶業部門カンキツ研究領域長塩谷浩氏にAI選果機やドローンによる農薬散布による労働時間削減効果や今後の課題等について講演いただきました。また、株式会社早和果樹園代表取締役会長秋竹新吾氏から「早和果樹園の取組と地域振興」について、早和果樹園の6次産業化の取組みや産地づくりへの想いを講演いただきました。



塩谷氏による講演

2. 4Hクラブとの合同研修会

有田地方4Hクラブ連絡協議会（会長：辻本真希氏）と合同で、管内市町持ち回りで研修会を行っており、今年是有田市で令和7年8月6日に開催し、会員及び関係者37名が出席しました。研修では、総田圭氏から「点滴灌水によるみかんの栽培管理」について、点滴灌水の利点やチューブの取扱い等の説明を受け、総田氏の園地で効果的な敷設方法等の意見交換を行いました。また、岩崎昌司氏に「10年後、20年後に向けた取り組み。～知ってもらおう、応援してもらえる活動～」として、マルシュへの出店、直販やSNSの活用などの販路開拓の取組みをご紹介します。最後に、早和果樹園生産部課長岩倉舞子氏から「みかん栽培に



総田氏園地での意見交換

おけるアグリノートの活用事例」として、営農支援アプリ「アグリノート」を活用した作業進捗・労務・経費管理や社員教育についてご説明いただきました。



岩崎氏による講演



岩倉氏による講演

3. 有田地方農業者団体連絡協議会研修会

有田地方農業士協議会、有田地方4Hクラブ連絡協議会と有田地方生活研究グループ連絡協議会（会長：宮地スミ子氏）で構成する有田地方農業者団体連絡協議会の主催で「気候変動に向けた対応 熱帯植物・トロピカルフルーツの栽培」研修会を令和7年2月14日に開催し、会員及び関係者50名が出席しました。まず、南九州大学教授前田隆昭氏から「熱帯植物、トロピカルフルーツについて」と題して、近年の気象変動への対応策として、熱帯・亜熱帯作物であるアボカド、パッションフルーツ、バナナ等の紹介や栽培技術の講義を受けました。また、近畿大学付属農場講師志水恒介氏から「マンゴーについて」として、栽培管理技術や育成品種「愛紅」等の説明がありました。参加者からは、県内でも栽培可能な温度帯や適応品種等に関する質問が出されました。

その後、近畿大学附属湯浅農場を見学し、栽培している熱帯果樹や農場の施設等について紹介いただきました。



前田氏による講演



近大湯浅農場のマンゴー栽培施設

普及活動レポート

REPORT

令和7年度日高地方農業士会活動

日高振興局 農業水産振興課

1. 日高地方農業士会総代会

総代会を4月15日に日高振興局別館で開催しました。議事に入る前に、令和6年度新規認定農業士の紹介を行いました。

総代会では、役員改選が行われ、新会長にみなべ町の指導農業士月向雅彦氏が選ばれるなど、新たな役員、理事が選出されました。

総代会終了後、話題提供として農業水産振興課の各担当から「野菜花き産地強化事業」や「経営継承応援資金」などの県単事業、クビアカツヤカミキリ防除対策について説明を行い、出席者からは、補助対象経費や申請期限など、補助事業の活用に向けた質問がありました。



総代会の様子



新役員の挨拶

2. 花育活動

日高地方花き連合会（会長：中尾貴宏氏）の活動に協力し、日高地域の小学校を対象とした花育活動を5月16日に実施しました。この活動は、子どもたちに当地方が全国有数の花き産地であることや花の魅力を知ってもらうために実施しており、今年度で17回目となります。

管内の生産者から提供された花で作成した花束と、日高地方の花を紹介したパンフレットを管内全ての小学校及び特別支援学校（計25校）の5・6年生に配布しました。

また、希望のあった12校では贈呈式を行い、うち5校で花き連合会員や農業士会員指導のもとミニ花束作り体験を実施し、児童は家族にプレゼントするのを楽しみにしていました。



作った花束を持って記念撮影
(みなべ町立岩代小学校)

3. 女性部会県外研修

日高地方農業士会女性部会（部会長：中村秀美氏）が、部会員相互の研さんと親睦を図るため県外研修を8月1日に開催し、大阪市で開催された2025年日本国際博覧会を訪れました。

会場では、「食を通して、いのちを考える」をコンセプトにしたパビリオン「EARTH MART」を見学し、食べることの当たり前を根本から見直すことで、食べ物への感謝の気持ちを育むことができました。また、他のパビリオンでは多様な視点から持続可能な社会について考える機会を得ました。

参加者からは、「農業を別の視点から見ることができた」「万博という今年しかできない貴重な研修だった」などの声が聞かれました。

4. 地域リーダー研修会

日高地方農業士会（会長：月向雅彦氏）が、地域リーダーとしての資質向上を図るとともに、会員相互の親睦と連携を強化するため研修会を11月5日に開催し、滋賀県湖南市にあるタキイ種苗株式会社の研究農場を訪れました。研究農場では、70haにも及ぶ広大な農場で10年後を見据えた育種を行っており、耐病性や高温耐性の品種育成に力を入れていることを学びました。

参加者からは、すいかの耐病性品種の育成の要望やなすの単為結果性品種の栽培特性について質問がありました。

また、昼食の時間を交流会として活用したことで、滋賀の食材を堪能でき、親睦も深めることができました。



担当者から説明を熱心に聞く参加者



ミニ花束作り体験（日高川町立川辺西小学校）



「EARTH MART」前で記念撮影



2050年まで漬ける梅干し「万博漬け」



会員の研鑽と交流を深める活動の実施

西牟婁振興局 農業水産振興課

1. 西牟婁地方農業士会連絡協議会総会・研修会の開催

4月16日、当協議会（会長：家高勇氏）は、県情報交流センタービッグ・ユーにおいて総会並びに研修会を開催し、会員及び行政関係者等約50名が出席した。

本年度は役員改選により、泉孝志氏が会長に就任し、会員141名の新体制にてスタートした。

研修会は、地域農業士の松場裕香氏から、令和6年度の女性部会による消費拡大推進活動に関する報告を行った。また一般財団法人雑賀技術研究所の山下貴文氏より、みかん外観選別機についての講演及び実演があった。

会員からは、「細かい傷はどの程度まで選別できるのか」や「水腐れ果も識別可能か」、「うめの選別はできないか」等の質問があり、熱心に聴き入っていた。



総会（家高会長挨拶）



みかん外観選別機の実演

2. 第31回 SUN・燦（さんさん）紀南農業者の集いを開催

9月10日、当協議会・西牟婁地方生活研究グループ連絡協議会及び西牟婁地方4Hクラブ連絡協議会と共に第31回 SUN・燦（さんさん）紀南農業者の集いを開催した。

この集いは、西牟婁地方の農業者が組織・年齢・生産部門などの枠を越えて、地域農業の発展について考え、取組につなげることを目的として毎年開催している。

今年度は「経営改善！小さなことからコツコツと」をテーマとして、県情報交流センタービッグ・ユーにおいて開



SUN・燦紀南農業者の集い講演

催し、3団体の会員と関係者併せて約80名が出席した。

研修は、ファームサイド株式会社代表取締役の佐川友彦氏から「農業経営改善の必要性とその進め方について」と題し、栃木県宇都宮市の阿部梨園での経営改善についての取組内容や今後の農業経営における経営改善の進め方、働きやすい農園づくりのポイントについての講演があった。また、農業水産振興課の平岩技師から、農作業事故の事例紹介と熱中症対策、行森普及指導員から普及指導計画重点プロジェクト「うめの超省力枝梢管理技術と低樹高コンパクト整枝導入推進の取り組み」に関する情報提供が行われた。

出席者からは、「経営改善と聞くと何から始めたらいいかわからないが、効率よく作業するために、例えば作業場を掃除する、というような身近なことからの改善の積み重ねが大事ということが分かった」等の意見があった。

3. 女性農業者セミナーの開催

11月13日、当協議会女性部会と西牟婁地方生活研究グループ連絡協議会は、うめ研究所において、管内女性農業者を対象とした女性農業者セミナーを開催した。

当日は11名が参加し、「うめ栽培におけるスマート農業技術」、「ドローン飛行の法律・ルールの基本」、「農作業用品の紹介・意見交換」の3つの内容で実施した。

「うめ栽培におけるスマート農業技術」及び「ドローン飛行の法律・ルールの基本」については、株式会社未来図より液剤と肥料のドローン飛行散布の実演と、県内農業におけるドローン利用状況及びドローン飛行の仕組みと法律の講演があった。さらに、うめ研究所井沼主任研究員及び向日研究員より、うめにおける農薬と肥料のドローン飛行散布の研究成果について説明があった。

最後に株式会社ユニワールド商品企画部より「農作業用品の紹介・意見交換」が行われた。販売されている手袋やヤッケ、農作業用エプロンなどを手に取りながら、使いやすさや、あったらいいなと思う商品について、担当者との意見交換が交わされた。

参加者の中には、ドローン防除のデモ飛行依頼を検討したいという声や、農作業用品については「普段から愛用している商品であり、担当者と話せる機会があって有意義だった。」という感想が聞かれた。



(株) 未来図によるドローン散布実演



農作業用品の紹介・意見交換

東牟婁地方農業士会の活動について

東牟婁振興局 農業水産振興課

1. 東牟婁地方農業士会総会を開催

4月17日、東牟婁地方農業士会（会長：杉浦仁氏）は、休暇村南紀勝浦において、会員及び農業水産振興課14名が出席のもと、総会を開催しました。

杉浦会長の挨拶と当部の伊藤副部長の祝辞の後、令和6年度の活動報告、会計報告、新年度の活動計画、役員改選などの議案が上がり、全て可決され、新会長に松本安弘氏が就任しました。

総会終了後は、東牟婁振興局農業水産振興課の橘主任から、「農業機械安全」、「収入保険」について、高垣技師から「農業版BCP」について話題提供が行われました。



杉浦会長の挨拶

2. 農産物即売会を開催

11月29日、東牟婁地方農業士会（会長：松本安弘氏）と東牟婁農業青少年クラブ連絡協議会（会長：安田裕志氏）は、那智勝浦町文化体育会館で行われた第47回那智勝浦町農産物品評会の開催に合わせて、農産物即売会を開催しました。

品評会では、那智勝浦町の農業士をはじめ多くの農業者から農産物129点が出展されました。

天候にも恵まれ、会場のテントには多くの人たちが訪れ、ダイコン、キュウリ、ショウガ、さつまいも、ほうじ茶など会員が生産した新鮮な農産物や加工品の売れ行きは好評でした。



即売会の様子

3. 管内視察研修会を開催

12月18日、会員の農業技術向上と相互の交流を目的として、管内視察研修会を開催し、会員等12名が出席しました。

研修先は、地域農業士の中正司ちか子氏牧場（串本町）、地域農業士の南条紀子氏農園（串本町）、指導農業

士の太田喜文氏、美保氏農園（那智勝浦町）の3カ所で、それぞれの園主が、経営内容や特徴（こだわり）、今後の目標等を説明しました。

参加者からは「牛のエサは何を与えていますか」「鳥獣害対策はどのようにしていますか」等の質問がありました。

今回の研修会がとても好評だったことから、次回は春頃に行く予定です。



中正司牧場（黒毛和種繁殖）



南条農園（露地野菜）



太田農園（ハウスイチゴ）

地域の逸品 !!

岩出市生活研究グループの隠れた名品!! 「焼きもち」

紹介者

岩出市 地域農業士

勢田 幸治

1. 商品の紹介

岩出市生活研究グループは、加工部を立ち上げられ、平成25年5月に「愛SUNさん工房」がオープン。以降お味噌やジャムなどの加工品のほか、岩出市の特産品を使った商品を開発・販売されてきました。

そのなかのひとつ「焼きもち」は、地元産のお米と、甘さ控えめの手作りのあんがとてもおいしいです。3個入と5個入があります。そうへいちゃんが目印ですので見かけたらぜひ!!



2. お問い合わせ先等

販売先

JAわかやまファーマーズマーケット OINACITY

愛SUNさん工房

地域の逸品 !!

有田みかん 100% ストレートジュース「飲むみかん」

紹介者

有田市 地域農業士

秋竹俊伸

世界農業遺産にも認定された有田地域は、美味しいみかんを栽培するのに最適な環境が整っています。2004年の加工事業参入時から、この有田地域のみかんの美味しさを損なうことのない加工品づくりを私たちは実践しています。

1. 商品の紹介

「飲むみかん」は、まるでみかんを食べているかのような味わい。濃厚なのにすっきりとした後味が特徴の和歌山県産有田みかん100%ストレートジュースです。皮を剥いて薄皮ごとすりつぶすように搾る「チョッパー・パルパー方式」で搾汁した果汁は、トロリした口あたりなのに後味はすっきり。外皮の油分が入らないので果汁の鮮度が保たれ、繊維質などの栄養分もたっぷり含んだ、まるでみかんを食べているかのような味わいのジュースに仕上がっています。

2. お問い合わせ先

株式会社早和果樹園（代表取締役社長 秋竹俊伸）

<https://sowakajuen.com/>

和歌山県有田市宮原町新町 275 - 1

0737 - 88 - 7279



地域の逸品 !!

「紀南のバナナ」

紹介者

田辺市 指導農業士

泉 孝 志

1. 商品の紹介

西牟婁地域は梅・みかん・スモモなど果樹栽培が盛んな地域ですが、最近バナナの露地栽培が地域の話題となっているので紹介します。

J Aわかやま紀南地域本部に話を伺ったところ、温暖化の影響が強まってきたことから露地でバナナを栽培できるのではないかという考えが強まり、数年前にJ Aが苗を取り寄せ、現在、紀南管内で20人以上が栽培に取り組んでいるとのことでした。

田辺市上秋津の園地では2023年から栽培を開始し、30本ほど植栽しています。

主な品種は耐寒性がある「アイスクリームバナナ」で、最大6mまで成長しており、2024年から収穫できるようになりました。

収穫期は8～11月で、2025年にJ Aがファーマーズマーケット「紀菜柑」においてバナナ見学ツアーを3回開催し、子供連れなどを対象に園地見学後バナナジュースを振舞ったところ、大変好評だったとのことでした。

園主に伺ったところ「冬は地面にシートを敷くなど、若干の寒さ対策が必要です。夏は乾燥させないため灌水頻度等を試行錯誤しています。直売所に出荷を始めました。今後は他の品種にも挑戦し、産地化につなげたいと思います」と意気込みを語ってくれました。

今後も近年の地球温暖化に対応した新しい品目として、バナナ産地化への取り組みに注目していきます。



バナナの房



露地バナナ園（田辺市上秋津）

県からのお知らせ

クビアカツヤカミキリから産地を守ろう！

県農林水産部鳥獣害対策課

■ クビアカツヤカミキリの特徴

もも、すもも、うめ、さくらなどの樹の内部を食害します。特定外来生物に指定されており、生きたまま持ち運ぶことは違法です。幼虫はおよそ2年間も樹の中で生息し見つけにくいいため、フラスを手掛かりに被害を探します。

◆産卵から2年で羽化する場合の生活環

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
成虫													
産卵		成虫は昼間に活動									樹木内で越冬		
幼虫	1年目	春になると幼虫は摂食を再開			孵化						活動休止期		
	2年目	活動休止期											
	3年目				蛹	羽化							



成虫

フラス（幼虫のふんと木くずが混ざったもの）

■ 被害状況（令和8年1月末現在）

県内では県北部から県中部にかけて17市町で被害が確認されています。

成虫の飛翔だけでなく、車両への付着や薪材等として被害樹が移動する可能性も示唆されており、どこで発見されてもおかしくない状況です。



着色箇所：被害市町

●幼虫初期はミンチ状のフラス、成長した幼虫からは大量の細かいフラスが排出されます。

●うめではフラスが樹の外に排出されにくい場合もあり、注意が必要です。

■ 実施すべき対策

- ・早期発見のための見回り
- ・予防対策 産卵阻止ネットの被覆
- ・成虫の防除(5月下旬～8月)
- ・幼虫の防除 薬剤散布や掘り取り
- ・被害樹の伐採・抜根(9月～翌年4月下旬)
- ・成虫の飛散防止ネットの被覆(成虫活動期までに実施)



産卵阻止のネット被覆

- 現時点では複数の対策を組み合わせる必要があります。産地の特徴や地域の被害状況、個々の農業経営の状況に照らし合わせて、最適な対策を検討し、取り組むことが重要です。
- 産地の対策検討や取組への支援策については、市町村やJAと連携して実施していますので、詳しくは最寄りの振興局等にご相談ください。

果樹産地を守るため、地域全体で取り組むことが大切です。
対策の実施や情報提供にご協力をお願いします！

【県全体の状況や対策の方針等については、以下にお問い合わせください】

- <農地> 農林水産部 農業生産局 鳥獣害対策課 TEL：073-441-2905
- <森林> 農林水産部 森林林業局 森林整備課 TEL：073-441-2981
- <公園等> 環境生活部 環境政策局 自然環境課 TEL：073-441-2779



クビアカツヤカミキリ情報
県鳥獣害対策課HP

県からのお知らせ

農業士認定事業について

県農林水産業のリーダーを認定

和歌山県農林水産部経営支援課

1月30日、和歌山県農業士・林業士・漁業士感謝状贈呈式及び認定式を開催し、農林漁業各分野で長年にわたり活躍された方々の功績に敬意を表して知事感謝状を贈呈しました。

また、県農林水産業の中核的な担い手で、地域のリーダーとして活動している方々を、農業士、林業士、漁業士として認定しました。今回の認定により、県内の農業士は701名となりました。

今回、感謝状を受け取られた皆様、農業士の認定を受けられた皆様は次のとおりです（敬称略）。

感謝状を受けられた皆様 21名

氏名	市町村
竹田 和正	和歌山市
松本 弥	和歌山市
藪利 昭	和歌山市
北村 勝己	和歌山市
笹尾 拓司	海南市
杉本 明彦	紀の川市
山名 司	紀の川市
辻岡 孝明	紀の川市
山本 勝彦	橋本市
山本 恵造	九度山町
名原 忠信	広川町

氏名	市町村
周参見 俊孝	有田川町
谷畑 進	有田川町
宮下 雅之	御坊市
夏目 庄一	御坊市
片山 綾子	由良町
宮本 浩樹	みなべ町
岡田 敦雄	みなべ町
中村 秀美	日高川町
平岩 義浩	田辺市
山本 孝一	白浜町



県からのお知らせ

農業士認定者の皆様 59名

指導農業士認定者 15名

氏名	市町村
泉 政行	和歌山市
南方 昌也	和歌山市
稲田 充弘	海南市
竹本 佳充	かつらぎ町
上野山 隆仁	有田市
成川 浩二	有田市
宮崎 孝清	有田市
成川 洋司	有田市

氏名	市町村
湯川 博司	広川町
勝丸 芳光	有田川町
小畑 公貴	有田川町
佐藤 公彦	御坊市
湯川 和宣	御坊市
井本 順子	御坊市
須本 修平	白浜町



地域農業士認定者 28名

氏名	市町村
山崎 吉則	和歌山市
山本 修也	和歌山市
辻本 智大	和歌山市
太田 勝也	紀の川市
田中 由香里	紀の川市
中村 友泰	岩出市
竹綱 一樹	岩出市
北山 剛	橋本市
千川 智史	湯浅町
北村 真文	湯浅町
嶋田 悦也	有田川町
宮地 智也	有田川町
笹本 雅也	御坊市
小林 雅人	御坊市

氏名	市町村
溝口 敏幸	日高町
岡 正樹	由良町
松下 正道	由良町
廣村 勝利	みなべ町
石橋 小百合	みなべ町
山ノ内 利浩	みなべ町
松井 有紀子	日高川町
藏 光綾子	日高川町
柏木 孝仁	日高川町
森 司	田辺市
垣内 利彌	田辺市
坂本 喬	田辺市
畑山 豪	白浜町
立野 仁徳	串本町

県からのお知らせ



青年農業士認定者 16名

氏名	市町村
嶋 大樹	和歌山市
田 端利行	和歌山市
南 方健人	和歌山市
馬 場晴也	海南市
森 本和真	海南市
楠 木 寛	紀の川市
戸 田真寿	かつらぎ町
八 森光宏	かつらぎ町

氏名	市町村
井 上信太郎	湯浅町
鉢 内康太	広川町
石 川裕基	広川町
石 川貴也	広川町
山 崎陽平	御坊市
相 原史郎	由良町
片 山泰三	由良町
福 永光展	白浜町



(参考) 農業士について

昭和51年から県知事が認定している制度。

地域農業の振興と農村の活性化にリーダー的役割を果たしている農業者に対し、付与される称号。「指導農業士(65歳まで)」「地域農業士(65歳まで)」「青年農業士(40歳まで)」の3つの区分がある。

令和8年3月現在の認定者数は以下の通り。

指導農業士	99名	(うち女性 13名)
地域農業士	523名	(うち女性 56名)
青年農業士	79名	
合計	701名	(うち女性 69名)



表紙の人

みなべ町 指導農業士

月向雅彦さん

月向さんは、うめ230aを栽培する専作農家で、青梅や梅干しのほか梅酒や梅肉エキスなど様々な加工品を生産から販売まですべて自社で行っています。

また、現在、日高地方農業士会会長や普及指導協力委員などを務められており、地域農業の発展に寄与されています。

和歌山の農業士 第26号

発行日：令和8年3月

編集：和歌山県

和歌山県農業士会連絡協議会

印刷：株式会社 協和



和歌山の 農業士

和歌山県
和歌山県農業士会連絡協議会

